影男

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
影男

【Ｎコード】
Ｎ６６２９Ｋ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
アメリカシカゴ。そこに住むジュゼッペとサリナは恋仲になる。だが幸せな二人の後ろに不気味な影が。高橋葉介先生の漫画をイメージした作品です。

第一章

影男

付き合うのは二人、男が一人に女が一人。

しかし好きになるのはそうとは限らない。好かれる相手が一人であるとは限らない、これが世の中の実に難しく厄介なことの一つである。

ジュゼッペ＝ゴッツイとサリナ＝ワカモトはそれぞれシカゴで生まれ育った。そして今もシカゴに住んでいる。ジュゼッペはイタリア系で黒い髪と目に陽気ではっきりとした顔立ちをしている。如何にもラテン系のその顔で性格も実に明るく楽しい人間として有名である。縮れた髪を上にあげている。

サリナ＝ワカモトは日系人である。彼女も黒い髪と目であるがその顔はジュゼッペに比べれば平坦なアジア系の顔をしている。しかし眉の形が流麗で全体的に整っている。黒いその流れる様な髪を後ろで束ねている。ジュゼッペの仕事は自動車の修理屋でサリナは喫茶店を経営している。そんな二人だ。

二人が知り合ったのはジュゼッペが彼女の喫茶店に入ったのがはじまりだ。彼はその店に入ってまずは面食らうことになったのであった。

「何だこの店は」

「何かおかしい？」

サリナがすぐにカウンターから述べた。

「一体何処かおかしいかしら」

「木のがっしりした椅子とテーブルに木の床と屋根？」

そして紙の札に何か太い手書きの文字で品物が書かれている。アルファベッドであるがそれでもそこにあるのはアメリカではなかった。

そこにあるのが何か。彼はすぐにわかった。つなぎの作業服を着

たままでカウンターに向かいそこにいる彼女の前に来てである。
「日本かい」
「そうよ、日本よ」
まさにそれだと答える彼女だった。
「私のパパとママの祖国なのよ」
「それであんたは違うのかい」
「こっちで生まれたからね」
こう答えた彼女だった。今はカウンターの中に立っているだけである。
「それにパパとママももう国籍はアメリカよ」
「日系アメリカンってわけだな」
ジュゼッペは席に座りながら述べた。そのカウンターもアメリカの普通の喫茶店とは違っていた。黄色い系統の色の木であり何処か白いものを感じさせる。そこに座ってそのうえで彼女と話を続けるのだった。
「つまりあんたは」
「そうよ、日系人よ」
「成程ね。名前は？」
「サリナよ」
彼女はにこりと笑って彼の問いに答えた。
「サリナ＝ワカモトっていうのよ」
「まさに日系人って名前だな」
「それであんたはイタリアンね」
今度はサリナから言ってきた。
「そうね。イタリアンよね」
「ああ、そうさ」
彼は笑って彼女の今の言葉に応えた。応えながらその手にオーダーを見る。見ればそれも手書きで色々と書かれていた。
「顔見ればわかるだろ。イタリアンさ」
「そうね。それで名前は？」

「ジュゼッペ＝ゴッツイさ」
気さくに笑って答えた。
「それが俺の名前ってわけだ」
「そう、ジュゼッペね」
「そう呼んでくれていいさ。あんたはサリナでいいかい？」
「ええ、それでいいわ」
サリナも気さくに笑って返した。この辺りのやり取りが如何にもアメリカらしかった。初対面ではあるが砕けて飾りのないものである。
「それでね」
「わかったぜ。それでサリナよ」
「何、ジュゼッペ」
「この店のお勧めは何なんだい？」
今度は店のことを尋ねたのだった。
「見たところ変わったものも混ざってるけれどな」
「ああ、うち和風喫茶店だからね」
「だから日本のものが多いってわけかよ」
「そうよ」
まさにそうだというのである。
「日本だからね」
「そう、日本だからか」
「日本のは美味しいわよ」
ここで誘う笑みになるサリナだった。明らかにそうしたものを頼んで欲しい、そうした感情がそのまま顔にも出ている、そんな状況だった。

第二章

「かなりね」
「そうか。だったらな」
「何を頼んでくれるの？」
「緑のお茶がいいな、まずは」
彼が最初に選んだのはそれであった。
「あとそれとな」
「それと？」
「饅頭ってのを貰おうかな。いや、饅頭って」
「それは聞いたことあるでしょ」
「チャイナタウンで見たな」
こう述べるのだった。己の記憶を辿ってだ。
「あの柔らかくて白いパンみたいなやつだよな。中に挽き肉が入った」
「日本のは中に甘いものが入ってるのよ」
「へえ、それも面白そうだな」
「じゃあそれにする？」
「ああ、それがいいな」
言われるままそれを選んだのだった。この辺りのやり取りは彼女に言われるがままという感じであった。
そしてその二つを頼んだ。これが二人の出会いであった。ジュゼッペはそれからも店に通いやがてその交際がはじまった。二人は仲のいいカップルになった。
それで仲良く二人で多くの時間を過ごしたがやがて。二人はそれぞれこんなことを考えだしたのである。それは自然となったものであった。
「そういえば」
「そうよね」

二人の考えは一致していた。
「何か俺達だけじゃないよな」
「そうよね。誰かいる？」
最初は何となくそう思ったのである。
「誰か横で見てないか？」
「物陰に隠れてね」
「それでこっそりと」
「覗いてるんじゃないかしら」
二人でいる時にそう考えたのである。同じ考えを抱いたのだ。
「誰が何の目的で」
「覗いてるのかしら」
「まさか」
「そうよね」
そしてこう考えていくのであった。
「俺達の仲を嫉妬して」
「それで仲を裂こうと」
「それで見ているのか？」
「機会を窺って」
考えは最初から被害妄想的なものであった。それははじめから中々強いものであった。
そうしてであった。彼等は二人でいるといつもその視線を感じるようになった。９６
「またいる」
「ええ、いるわ」
「見ているよな」
「あそこから」
二人は今は店の中にいた。サリナのその店である。店はいつも繁盛しているがこの時間は閉店間際なので二人以外には誰もいない。いるのは二人だけの筈だ。
だが店の扉のところを見てだ。それで言うのだ。

「また覗いて」
「嫉妬、じゃないわね」
「なあサリナ」
ここでジュゼッペは真剣な顔でサリナに問うのだった。
「御前誰かに怨み買うようなことしたか？」
「あんたは？」
「いつもつけられるようなものはないな」
「私もよ」
「だよな。俺もだ」
ジュゼッペもこう答えた。
「だったらあいつは何なんだろうな」
「ストーカー？」
ここで彼女は言った。
「私への」
「ストーカーかよ」
「ねえ、ジュゼッペ」
サリナはそう感じるとすぐにであった。怯える顔で彼に言ってきた。

第三章

「まさか私をずっと一方的に見ていて」
「君をずっとなのかい」
「気味が悪いわ」
嫌悪に満ちた顔での言葉だった。
「本当に誰なのかしら」
「そういえば確かに」
ここでジュゼッペも言うのだった。
「俺も感じる」
「ジュゼッペもなのね」
「ああ、いる」
彼も感じたのだった。その邪な視線をだ。
「俺達に見つからないようにして」
「誰なのかしら」
「それはわからない」
わからないのは事実だ。しかしであった。
「けれどいる、絶対に」
「そうね。間違いないわ」
「サリナを奪おうとしているんだ」
彼は言い切った。それもはっきりとだ。
「俺の手から」
「私は嫌よ」
サリナもはっきりと言った。その聞き間違えようのない口調で。
「ジュゼッペ以外の人になんて」
「俺もだ、絶対に渡さない」
お互いに言い合う。何処までも強く。
「サリナは」
「御願い私を守って」

「わかっている。けれど相手は何処に」
「何処にいるのかしら。けれど視線は」
「ああ、いる」
二人は周囲を見回す。しかしであった。
その視線を持っている者は誰も見当たらなかった。それは毎日何度も何度も二人で確かめるがそれでもであった。結局見つからないのであった。
どうしてもだ。しかし視線は感じる。
それで何度も探すが見つからない。こうしたことの繰り返しであった。それを繰り返しているうちに二人共参ってきた。そしてやがてこんなことを言い出した。
「黒い男がいるんだ」
「そいつが私を見ているのよ」
「いつも俺達の後をつけて探って」
「薄気味悪いことこの上ないわ」
こう周りにも言いはじめた。しかし他の者は誰もその黒い男を見つけることができなかった。二人はその黒い男の姿も描くのだった。
それは。黒い帽子に黒い服を着た薄気味の悪い男である。何とも言えぬその不気味な男がサリナをいつも見ているというのである。
「いつも姿を見せてすぐに消える」
「そうしてばかりなのよ」
「捕まえようとしても絶対に捕まえられないんだ」
「それでずっと見ているのよ」
二人の主張はこうであった。二人は見ていると言う。しかし誰もその黒い男を見ることはない。誰もがこのことにいぶかしむしかなかった。
そしてここで。ある中年の精神科医が出て来たのだった。
黒い髪を真ん中で分け引き締まった、それでいて垂れ目で人懐っこい表情をしている。白い医者の服も実によく似合っている。彼の名前をアーサー＝シドウという。

その名前を聞いて。まず言ったのはサリナだった。
「シドウっていいますと」
「そうだよ、私も日系人だよ」
こう彼女の問いに答えた。
「君と同じね」
「そういえばアジア系の顔ですね」
「アジア系アメリカンも多くなったさ」
伊達に人種の坩堝と呼ばれているわけではない。アメリカには日系人以外にも中国系や韓国系、それにフィリピン系にベトナム系とアジア系も多い。アメリカにおいては少数でありながらその発言力は中々強いものになってきているのである。日系人もである。

第四章

「本当にね」
「まあ私もそうだし」
「私はロサンゼルス生まれでね」
そこで生まれたというのである。
「両親はアリゾナで結婚してね」
「ロサンゼルス生まれでアリゾナに？」
「ああ、収容所に入れられていてね」
「収容所！？」
それを聞いて眉を顰めさせたのはサリナではなくジュゼッペであった。
「何だそりゃ、アメリカにそんなものがあったのか」
「あったよ。第二次世界大戦の時にね」
「へえ、あの戦争の時にかい」
「そうさ、西海岸にいる日系人は日本に協力すると思われてそれでなんだよ」
「そんなこと言ったらアラブ系なんか全員隔離じゃねえのか？」
「まあそういう時代だったんだよ」
アーサーは首を少し傾げてから述べた。
「昔はね」
「戦争は悪い奴をぶっ潰すもんだけれどな」
これがジュゼッペの認識だった。彼にしてもアメリカで生まれ育っているのでアメリカが正義の国であると思っている。そしてそれと同時に自由の国だとも思っていた。
「それでも収容所なんてな。何処の悪の国家だよ」
「私もアメリカは正義の国だと思うさ」
アーサーはいぶかしみ続けるジュゼッペに対してさらに述べた。
彼もやはりアメリカ人でありこうした認識を持っているのである。

教育の結果だ。
「けれどそういうことも起こるんだよ」
「難しい話だな」
「歴史というやつだよ」
また言うアーサーだった。
「それもね」
「歴史か。俺はハイスクールまで歴史はずっと赤点だったんだがな」
「それとは関係ないさ。とにかくだ」
「ああ」
「君達は二人共見てるんだね」
話を打ち切って単刀直入に述べてみせた。
「そうだね。その黒い男を」
「はい、それは」
サリナがこう彼に答えた。
「もう何度も。いつも一瞬ですが」
「一瞬ね」
「見えたと思ったらいないんですよ」
「それは俺もってわけでな」
ジュゼッペも言うのだった。
「何故か見えてもそれは一瞬で」
「それで消えるのか」
「まるで影の中に消えるみたいに」
「そんな感じなんだよ」
こう話すのであった。
「おかしな話だけれど」
「確かにいるんだ」
「そうなのか」
アーサーはとりあえず二人の話を聞いた。そしてそのうえでまた言うのだった。
「それだったら」

「それだったら？」
「何かわかったの？」
「うん、じゃあ」
こうして彼はまずは二人を自分の病院に連れて行った。そうしてそのうえで様々な検査をした。それは精神的なものを主に据えたものだった。
特に夢を見るのだった。それをだ。
二人を眠らせてそのうえで夢の言葉を聞くのだった。
二人並んで横たわっている。そうしてその中で。
言葉が出て来る。自然にだった。
「見ているのよ」
「そうだ、見ている」
眠りながら言葉を出していく。
「あいつが」
「間違いなく」
「見ているのよ」
「俺達を」
こう言っていく。その言葉を聞きながら。
メモを取っていく。しかもしきりに。
そうしながら見ていってだ。数日後こう二人に言うのであった。

第五章

「その黒い男の正体がわかったよ」
「えっ、わかったんですか」
「それでいるんだよな」
「いることは間違いない」
これは事実だと言う。
「しかしこの世界にはいないんだ」
「それは一体」
「どういうことなんだ！？」
「彼は。そのストーカーは」
「そのストーカーは」
「それで何処に」
「君達の中にいるんだよ」
こう二人に言ったのである。
「君達のね。その中にね」
「私達の中って」
「どういうことなんだ、そりゃ」
「つまりだね。君達は思い込んでいるだけなんだよ」
それだというのである。
「そのストーカーがいるってね。二人でね」
「私達が二人共そいつがいるって」
「思ってたってのかよ」
「最初はどっちが先に言い出したのかはわからないよ」
アーサーはそのことは調べなかった。それに調べるつもりもなかった。それよりもその二人だけが見えているという事実を考えたのである。
「けれど見えているのは」
「私は確かに」

「俺も」
「君達だけだったからね」
このことを指摘した。今度はそれであった。
「他の誰も見ていないし」
「それもあって」
「そうだってのか」
「まあね。考えてみればおかしな話だけれどね」
こうも言いはした。
「けれどね。君達は真剣に愛し合っている」
「ええ、それはね」
「その通りさ」
二人の表情がここでは明るいものになった。二人の仲について話すとこのこと自体はとてもはっきりとして話をすることができたのである。
「だって私達って」
「何もかもがぴったりと合うしな」
「そう、実に仲がいい」
アーサーはその仲についても言及した。
「仲がいい。まさにおとぎ話の王子様とお姫様みたいに」
「それは言い過ぎよ」
「王子様とお姫様って柄じゃないぜ」
二人は笑ってそれは否定した。
「ただの喫茶店の娘だし」
「修理工場をやってるだけだって。ハイスクールを出てすぐにな」
「いや、これは例えだよ」
だがアーサーはこう話すのだった。
「これはね。例えなんだよ」
「例え」
「そうなのかよ」
「そう、童話では王子様とお姫様は幸せになる」

アーサーは今度は童話の基本的な話の流れについて述べた。
「けれどそれまでには」
「それまでには？」
「障害があるね」
話が戻ってきていた。語るアーサーのその表情がそのことを二人に教えていた。
「例えば魔女とかね」
「魔女」
「ってことは」
「そう、君達は無意識のうちにその魔女を欲しがっていたんだ」
そうだったというのである。
「そしてその魔女が」
「あの黒い男だった」
「ストーカーだったのか」
「そういうことだったんだ。愛は障害がある方が燃える」
このことについても述べた。
「だからだよ。君達は無意識のうちにストーカーがいるって思ったんだよ」
「それでだったの」
「あれが出て来たってのか」
「そうさ。これで話はわかったね」
「いえ、ちょっとそれは」
「わかれって言う方が無理じゃねえのか？」
二人はいぶかしむ顔でこうアーサーに返した。
「私達がそんな奴がいることを望んでいたって」
「それは」
「その証拠に君達だけが見えていた」
しかしアーサーはその事実を述べる。
「それが何よりの証拠というわけなんだよ」
「そういうものなのかしら」

「それであんな奴が見えたのか」
「けれど君達はそれの正体がわかった」
アーサーはこんなことも言った。
「いないということもね。だからもうあの黒い男は見ないよ」
「そうなの。もう」
「いなくなったっていうのかよ」
「完全にね。幻は幻だってわかった時に幻じゃなくなる」
こんな言葉も出て来た。
「だからだよ。これで私の治療は終わったよ」
その言葉通り二人はもうその黒い男は見なくなった。そして二人はやがて結婚して仲良く過ごした。だがそれまでには確かにそうした障害があったのである。いなかったにしてもだ。

影男　　完

２００９・１２・２９

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6629k/

影男

2010年10月8日15時12分発行